

10年ぶりの単独出場。

僕らは今、「自分たちのチーム」をつくっている。



5月9日から開催された第65回春季北海道高等学校野球大会函館支部予選。そこには、10年ぶりに「単独チーム」として公式戦の舞台に立つ、森高校野球部の姿がありました。

昨年、部員わずか4人からスタートしたチームは、転入生2人と、今春、新入生9人を迎え15人となりました。厳しい時代を乗り越え、聖地・甲子園を経験した指揮官のもとへ集まった選手たちは、夏の大会、そしてその先の未来へ向けて、確かな一歩を踏み出しています。

■「吉田監督のもとで野球がしたい」

——引き寄せ合って集まった仲間

現在のチームを支える2年生たちに、森高を選んだ理由を尋ねると、共通して返ってきたのは「元プロ野球選手である吉田雄人監督の指導を受けたい」という強い思いでした。「吉田監督の存在が、森高に入学する最大の決め手でした」という声。その熱意は人から人へと繋がっていきます。親同士のつながりから野球部の魅力を知って進学を決意した選手。新入生の中には、SNSで「森高と一緒に野球をやろう」と連絡をもらい入部した選手もいます。「監督のもとで強くなりたい」という純粋な憧れが呼び水となり、一人、また一人と仲間が増えていったのです。

■王者との一戦で得た「確かな手応え」

5月10日、新チームで挑んだ春の大会。対戦相手は、昨年の秋季北海道高等学校野球大会函館支部予選を制した強豪・函館大学附属柏稜高校でした。

結果は0対6での敗戦。しかし、スコア以上の大健闘でした。あと一歩で得点という緊迫した場面も作り出し、強豪の壁を肌で感じながらも、確かな手応えを得ていました。

選手たちは「守備の安定感が全然違った。うちが1本打てない所でも相手はしっかり打っていた」と冷静に差を見つめる一方、「初めての単独出場で手応えがあった。次は勝ち上がれるチームになりたい」と前を向きます。

吉田監督は「10年ぶりの単独出場は学校や地域にとって特別な意味を持つ大会でしたが、選手たちはすでに、その先を見据えています」と話します。

一方で、チームの現状については「まだ“チームのカルチャー（文化）”がない」とも指摘。

「練習への向き合い方、日常生活の過ごし方、決まりごとを守る姿勢。それらすべてが試合の勝負所で出ます。野球の技術だけでなく、人としてどう成長するかが勝負です」と言葉に力を込めました。



試合前、円陣を組んで士気を高め、一丸となって初戦に挑む



日々、成長を続けている上出投手の力強いピッチング

■ 地域の応援を背に、それぞれの夏、それぞれの未来へ

現在、自宅から通う選手も、親元を離れて寮生活を送る選手も、それぞれが夜の素振りや体づくりのための増量、減量など、自ら立てた課題にストイックに向き合っています。

グラウンド整備、冬期間の練習場所、そして生活の拠点となる寮についても町内業者や多くの人の協力と支援がありました。

町中で「頑張ってね」と声をかけられることも増え、こうした地域一丸となった温かいバックアップが、選手たちが前進を続ける大きな原動力になっています。

間近に迫る夏の大会、そして新チームの未来へ向け、2年生にそれぞれの決意を語ってもらいました。

渡部 春の敗戦をきっかけに、どれだけ成長できたか分かる大会にしたい

三上 自分が打って勝つ気持ちで全力でプレーしたい
上出 目標を達成するためにも、夏は全力を出し切って勝ちにいききたい

管井 まずは単独チームとしての『公式戦初勝利』を掴み取りたい

佐々木 自分は秋の大会からの出場になるので、まずは日常生活を正しく送り、秋に向けて実力を蓄える

藤川 (煌) 3年の春からの出場に向けて、基礎からしっかりやって、公式戦でチームを勝たせる活躍をしたい

4人から始まった森高校野球部。選手たちは今、「自分たちのチーム」をつくり上げています。その先にどんな景色が広がるのか。今後も挑戦は続きます。



▲好プレーで締めくくり笑顔でベンチに戻る選手たち



▲攻守交代の間、吉田監督の指示を確認しあう選手たち



▲寮生全員で食卓を囲む。現在、町では寮生1人あたり月額5万円を町内事業者等が運営する学生寮に支援している。





廃部となっていた森高校の剣道部が復活！
静かだった道場に再び竹刀の音が響き渡る。

一度は途絶えた森高校剣道部が、この春、再び動き始めました。

道場に立つ部員は、2年生のこいずみりくと小泉陸虎さんただ一人。

小学校時代は大将を務めるほど剣道に打ち込みましたが、中学進学後は競技から離れた時期もあったといいます。

小泉 忙しくて、いろいろなことが嫌になってしまって…。それでも高校生活を送る中で、「また剣道がしたい」という思いは心のどこかに残っていました。

そんな時、令和8年度から始まった剣道部復活プロジェクトの話を聞き、4年ぶりに竹刀を握る決意をしました。

プロジェクトの指導者に抜擢されたたかまつじゅんいち高松潤一さんは、「陸虎の剣道に対する”好き”という気持ちを引き出し、自分の指導が重荷にならないように気を付けている」と語りました。

Q 久しぶりの剣道はどうですか？ 4月の春季大会では復帰後初の一勝をとったそうですね。

小泉 4年ぶりなので、体力のブランクや竹刀を振ったときに踏み込みのズレがあったりして自分のクセを感じました。

高松先生 春季大会では「あれ誰だ？」と注目の的でした。指導していると、間合いに迷いが出たり、考えすぎて動けなくなっているなという場面もありますが、実力はたしかですね。

Q 部員一人だと知ってどう思いましたか？

小泉 不安 55%、楽しみ 45%…。でも、この話に乗ってよかったなと思います。

今後、結果を残すことができれば全国出場も目指したいですし、部員が5人いると団体戦にも出場できるので増えてほしいと思います。

小さな一歩から始まった森高校剣道部。その挑戦は、仲間が集う未来への第一歩でもあります。再出発した剣道部の挑戦は、高体連へと続きます。



小泉陸虎さん（左）
剣道部のほか、バドミントン部と生徒会活動にも取り組む。
高松潤一さん（右）
森剣道スポーツ少年団代表・教士七段。これまで全国大会出場選手を多数育成。

野球部に続き、バドミントン部や剣道部も復活し、生徒たちの頑張りが地域に明るい話題を届けてくれていると感じています。部活動を通して、生徒たちは仲間との関わりや挑戦することの大切さなど、さまざまなやりがいや価値を見つけています。学校生活だけでなく、ボランティア活動などにも積極的に取り組む姿も見られます。この復活が、今の生徒だけでなく、未来の世代へも引き継がれていくことを願っています。



楯石校長先生より